

## 総説

# レズビアンカップルが子どもをもつことに関する文献レビュー

## A Literature Review on Studies on Lesbian Couples Having Children

上田恵, 中島通子, 西田絵美

Megumi Ueda, Michiko Nakashima, Emi Nishida

キーワード：レズビアンカップル, 子どもをもつ, ドナー受精, 家族形成

Key words : Lesbian couples, Have children, Donor insemination, Family formation

### 要旨

近年, 日本においても数年前からレズビアンカップルが妊娠・出産し, 新たな家族形成を行っていることが報告されている. 本研究はレズビアンカップルが妊娠・出産を通して子どもをもつことに焦点をあて, その研究動向を把握するとともに, 本邦における今後の研究課題について検討することを目的とし, 国内外の文献検討を行った. その結果, 本邦においては, 子育ての実態, 子どもをもつことを選択した過程や子育ての中で直面する問題について, 社会学及びその関連分野で事例報告がされていたが, 看護学領域ではレズビアンカップルが妊娠・出産を通して子どもをもつことに関する先行研究は行われていないことが明らかになった. 一方海外では, レズビアンが子どもをもつことに関する研究が様々な視点から継続的に行われ, 蓄積されている.

今後はリプロダクティブヘルス・ライツの視点から, すべての女性の子どもをもつ権利について, ケアに関わる医療職者がどう考え, どのように対応していくのか検討する基礎的資料とするため, 本邦においても, 海外で行われているような様々な視点からレズビアンカップルの妊娠・出産の実態や家族形成に関する研究に早急に取り組む必要がある.

### Abstract

Recently, it has been reported that lesbian couples have been becoming pregnant and forming new families in Japan.

The purpose of this study was to focus on the fact that lesbian couples have children through pregnancy and childbirth, to understand the research trends, to examine future research issues in Japan, and to examine the literature in Japan and overseas.

Results show that, in Japan, there were case reports on the actual situation of childrearing, the process of choosing to have children, and the problems faced in childrearing in sociology and related fields. However, in the field of nursing, it became clear that there is no previous studies on lesbian couples having children through pregnancy and childbirth. Outside of Japan, studies on lesbian pregnancy, childbirth, and parenting have been continuously conducted and accumulated from various viewpoints.

From the perspective of reproductive health rights, basic materials are required for medical professionals to consider how lesbian couples become parents and how to manage them. Therefore, there is an urgent need for research on the reality of pregnancy, childbirth, and family formation of lesbian couples from various perspectives in Japan as has been conducted worldwide.

## I. はじめに

ここ数年で、多様な性に関心がむけられ、性的マイノリティという言葉は一般に認知されるようになった。社会は当事者にとって生活しやすい方向を向いているが、その中でレズビアンは女性としての生殖能力を持ちながらも、性指向上、異性との性交渉で子どもを得ることが難しいため、その機能を発揮できず、生物学的な親となることから除外されると考えられてきた。しかし近年生殖医療を利用することにより、男性との性交渉がなくとも、子どもをもつことが可能となっている。

米国における2000年の調査では(Simmons & O'Connell, 2003)、女性同性カップルの34%が子どもをもつ世帯を形成しており、英国では子どもをもつレズビアンの75%が非配偶者間人工授精によって、授かったと報告されている(Millbank, 2003)。本邦でも数年前から、レズビアンが妊娠・出産するようになり、ソーシャルネットワークサービス(以下SNS)などで子どもをもちたいレズビアンカップルが情報交換し、子どもを得るための活動を行っている。柳原(2007a)、藤井(2009)、村田ら(2014)は今後生殖医療を利用し、妊娠・出産に至るレズビアンは増加すると述べており、医療職者は、多様な家族形成についての理解を深め、レズビアンが自分と遺伝的関係のある子どもを出産し、同性パートナーと養育していくという希望にどう対応するのかということを検討することが必要である。

海外では生殖医療を利用し、子どもをもつレズビアンの家族形成に関する調査が蓄積されているが、本邦においてレズビアンカップルが子どもをもつことに関する先行研究は少なく、その経験やプロセスは明らかにされていない。そこで、国内外のレズビアンが妊娠・出産を通して子どもをもつことに関する文献レビューを行い、その動向を把握するとともに、国内における今後の研究課題を明らかにしたいと考えた。

## II. 研究目的

本研究は、国内外のレズビアンが妊娠・出産を通して子どもをもつことに関する文献レビューから、その動向を把握するとともに、日本における今後の研究課題について、検討することを目的とする。

## III. 研究方法

### 1. 用語の定義

本研究における用語の定義は、以下のとおりである。

### 1) レズビアン

本研究ではレズビアンを身体的な性別が女性で、心の性も女性、恋愛対象が女性に向く女性と定義する。

### 2) 子どもをもつ

レズビアンが、妊娠・出産を通して自分と生物学的なつながりのある子どもをもつこととする。

### 3) 家族形成

Hanson et al. (2005)は家族を「感情的、物理的、経済的に支え合っている2人以上の個人から成る」と定義している。本研究では感情的、物理的、経済的に支え合っているレズビアンのカップルのどちらか一方と血縁関係のある子どもをもち、その子どもを二人で養育していくことと定義する。

### 4) 同性パートナー

本研究の対象者であるレズビアンの性愛が向かう女性のことである。非生物学的母親となり、子どもとは血縁関係、戸籍上の親子関係はない。

### 5) 生物学的母親

出産した子どもと遺伝的関係にあるレズビアン。

### 6) クエスチョニング

性自認、性指向が定まっていないセクシャリティ、自分のセクシャリティを探索中。

## 2. 文献検索の方法

国内文献については医学中央雑誌、CiNii Articles、Google Scholar、J-STAGEや最新看護索引において、国外文献と同じ検索用語を用いたところ研究論文はみつかることができなかった。そのため、キーワードを「レズビアン」または「女性同性愛者」、「LGBT」として、幅広く文献を抽出しなければならなかった。検索開始期間は収録開始年から2018年12月までとした。キーワード検索の結果、テーマと合致したものは医学中央雑誌では54件中1件、CiNiiでは245件の検索結果の中4件であった。Google Scholarでは54件がヒットしたが、その中で研究論文以外の学術資料を除外し4件を抽出した。また、J-STAGEや最新看護索引での検索結果は重複していたため除外した。抽出された文献を精読し内容の検討を行い、研究のテーマについて関連する内容が明記されている6件の文献を抽出した。

国外文献はPubMedを利用し、検索条件として発表情語を英語、検索期間は収録開始年から2018年の12月31日までとし、ドナー授精を利用して子どもをもったレズビアン及びレズビアンカップルにフォーカスをあて文献を抽出した。検索用語は「lesbian and reproductive」「lesbian and parenting」「lesbian and

family formation」 「lesbian mother」とし、PubMedでは54件に絞った。その中には男性同性愛者やトランスジェンダー、同性カップルが子どもを得るために受ける不妊治療の結果など、本研究のテーマとは直接関連しない論文も含まれていたためこれらを除外した。PubMedの検索結果に関連論文として表示されていたScienceDirect、Wiley Online Library、Google Scholarからも本研究テーマと関連する研究論文をピックアップした。抽出した記事の全文を精読し、レビュー文献3件を除外し、最終的に本研究テーマと合致する研究論文14件を抽出した。

### 3. 分析方法

抽出された国内・海外文献について、発表年、研究対象者、研究領域、論文が発表されている国、結果の概要を抽出した。また、抽出した結果の概要については内容の類似しているものを分類し、カテゴリー化した。

## IV. 結果

### 1. 国内文献の概要

国内文献の概要を表1に示す。

レズビアンカップルが妊娠・出産を通して子どもをもつことに焦点をあてた国内文献は少なく、研究分野はすべて社会学及びその関連分野で、6文献のうち3文献は同一著者によるものであった。また、看護学領域でレズビアン妊娠・出産を通して子どもをもつことに関連した研究論文は見当たらなかった。

レズビアンの人口規模、国内で子育てをしているレ

ズビアンの割合や、自身と遺伝的關係をもつ子どもを望むものの実態などについては、LGBTの支援団体（血縁と婚姻を越えた関係に関する政策提言研究会、2004）や企業株式会社（博報堂D Yグループ株式会社、2016）が独自に行った調査があるものの、日本国内において、公的な統計は存在しなかった。

性的マイノリティが子どもをもつことに関する意識については、一般の大学生を対象とした研究（村田ら、2014）が実施されており、その対象の中には医療系の学生も含まれていたが、レズビアンのみに限定された結果ではなかった。また、臨床現場の医療職者を対象とした意識調査は見つからなかった。

子どもをもつレズビアンカップルを対象とした研究は、インタビューによる事例報告であり、対象者の中にはアメリカ人と日本人のカップルも含まれていた。また研究対象者は異性との間の婚姻関係で得た子どもをもつものや、養子縁組を行ったケースなどさまざま、必ずしも同性カップルの関係の中で、遺伝的關係のある子どもをもつ対象者ではなかった。

### 2. 国内文献の内容

レズビアンの育児やその実態については、血縁と婚姻を越えた関係に関する政策提言研究会(2004)が行ったアンケート調査の結果で、パートナーをもつレズビアン、養子縁組を利用したいと考えている者、精子バンク等を利用する必要性を考えている者がどの程度存在するのかの報告がされていた。また、藤井(2009)は国内で子どもをもつ女性同性愛者のほとんどが過去に男性との婚姻関係で設けた子どもと推測されると報

表1 国内文献概要

	タイトル	著者	分析対象者	研究領域	発行年
1	セクシュアル・マイノリティにおける生殖補助医療に対する意識調査	村田 藍 川崎 妃香里 菅沼 信彦	大学生742人	性科学	2014
2	同性間パートナーシップの法的保障に関する当事者ニーズ調査	血縁と婚姻を越えた関係に関する政策提言研究会	レズビアン296人	社会学	2004
3	育児・子育て希望者の多様化がもたらす課題	柳原 良江 (a)	日本で子育てをするアメリカ人と日本人のレズビアンカップル	社会学	2007
4	「親になること」におけるジェンダーの力学—レズビアン・マザーたちのライフヒストリーの語りから	柳原 良江 (b)	養子縁組、過去の異性愛者との婚姻、精子提供で得た子どもをもつ9名のレズビアン	社会学	2007
5	女性カップルの生活実態に関する調査分析 法的保障ニーズを探るために	杉浦 郁子 釜野 さおり 柳原 良江	9組のレズビアンのカップル	社会学	2008
6	日本におけるレズビアンの妊娠・出産	藤井 ひろみ	なし	ジェンダー	2009

告している。

村田ら(2014)は一般の大学生に対し、性的マイノリティに生殖補助医療を適応することの可否についてのアンケート調査を行っており、同性カップルが生殖補助医療を利用して子どもをもつことについて、疑問視する回答は医療系の学部で高い割合を占めていたことが報告されていた。

柳原(2007a, 2007b)と杉浦ら(2008)は、養子縁組や人工授精により子どもを得たレズビアンへの半構造化インタビューを通して、子どもをもつことに至った経緯、子育ての実態や家庭でのジェンダー役割、精子提供を受けることの困難さ、生まれた子どもの親権の問題、子育ての中で直面する問題についての報告がされていた。

以上の結果より、国内ではレズビアンカップルが多様な方法を選択して子どもを得ている実態と法的保護の視点からみた研究が社会学領域において行われていることがわかったが、その事例数は少なく動向を把握するまでに至らなかった。

### 3. 国外文献の概要

国外文献の概要を表2に示す。

欧米ではレズビアン妊娠・出産と子育てに関する研究が、様々な視点から継続的に行われ蓄積されている。今回の分析対象として抽出された文献の多くは、同性婚や同性愛者が精子バンクや生殖補助医療を利用することが可能な先進国で実施されている。抽出した14件はアメリカ合衆国(3件)、オランダ(1件)、スウェーデン(3件)、英国(3件)、ベルギー(2件)、オーストラリア(2件)で実施されており、研究分野は心理学(5件)、看護・助産学(8件)、医学遺伝子学(1件)で実施されていた。医療系の研究は抽出された文献の半分以上を占めていた。

### 4. 国外文献の内容

抽出された国外文献の内容は「子どもをもつ動機」「生殖医療を利用して子どもをもつ過程での検討事項」「精子ドナーの選択」「不妊治療に伴う感情」「生物学的母親と非生物学的母親」「医療職者から受ける差別」に分類することができた。

#### 1) 子どもをもつ動機

Bos et al.(2003)は、レズビアンが子どもをもつことを希望する動機を調査し、異性家族のグループとレズビアン家族を比較した。その結果、両者に差異はなく、子どもをもつことに関連する愛情と幸福感、および親が子どもをもつための最も重要な動機として、人生の充実をもたらすという期待を報告している。また、

レズビアンは親になるとき、自分の親や友人などに子どもをもつ動機を説明することを要求されるために、異性愛者の両親よりも、子どもをもつ理由について考える時間を費やしており、子どもをもちたいという欲求が異性愛者のカップルよりも強いと報告している。

Goldberg & Scheib(2015)は米国において、非配偶者間人工授精をうけた同性パートナーをもつ女性(レズビアン72%、バイセクシャル12%、クエスチョニング11%、ゲイ自認5%)36名とシングルマザー14名の計50人に対し、いかにして養子縁組ではなく人工授精(非配偶者間人工授精)によって子どもをもつことを選択したのかを調査している。その結果、同性とパートナー関係をもつ女性の36名中58%が養子縁組を検討していたが、実際に養子縁組を実施したのはわずか1名(3%)であった。養子縁組よりも非配偶者間の人工授精を選択した理由は、妊娠したいという欲求や子どもとの生物学的なつながりを望むことに加え、養子縁組に伴う費用の問題や、養子縁組プロセスの複雑さ等から最終的には採用に至らない現実を指摘している。

#### 2) 生殖医療を利用して子どもをもつ過程での検討事項

Hayman et al.(2015)はレズビアンが子どもをもつ選択をするときに、どちらが子どもを出産するのか、精子ドナーを誰にするのか、受胎方法(膣授精、子宮内授精、体外授精)は何を選択するのか等を意図的に決定していることを報告している。また、レズビアンどちらが妊娠するかについての選択は、年齢および健康状態、ならびに妊娠したいという個々の欲求および妊娠する能力に基づいて決定を下す傾向があると報告している。

Chabot & Ames(2004)も同様に、10組のレズビアンカップルへのインタビューにより、レズビアンカップルが精子ドナーの人工授精を利用して、親になる過程で経験したプロセスについて検討した結果、「親になりたいのかどうか?」「情報やサポートへのアクセス」「親になるためにどのような方法を選ぶのか?」「どちらが妊娠するのか?」「精子の提供者をどのように決定するのか?」「二人の母親の呼び方」「親権の交渉をどのようにするのか」という7つの意思決定を行っていることを報告している。

Bos et al.(2003)はレズビアン女性は、受胎(妊娠の成立)に関していくつかの決定をするために時間を費やすことで、異性愛者よりもより母になる年齢が高いことを指摘している。



表2 国外文献概要

	タイトル	著者	国	分析対象者	研究領域	発行年
1	Lesbian mothers' experiences of maternity care in the UK	Wilton T. Kaufmann T.	UK	レズビアンを自認する妊娠経験のある50人の女性	助産学	2001
2	Decision-Making in Planned Lesbian Parenting: An Interpretative Phenomenological Analysis	Touroni E. Coyle A.	UK	9組のレズビアンカップル	心理学	2002
3	Counselling lesbian couples: requests for donor insemination on social grounds	Baetens P. Camus M. Devroey P.	BEL	DIを申請し、カウンセリングを受けたレズビアンカップル95組	医学遺伝学	2002
4	Planned lesbian families: their desire and motivation to have children	Bos H.M.W. Balen F. Boom D.C.	NLD	合計100人のレズビアン、2人家族が100人の異性愛者家族を比較	心理学	2003
5	"It wasn't 'let's get pregnant and go do it' ": Decision Making in Lesbian Couples Planning Motherhood via Donor Insemination	Chabot J.M. Ames B.D.	USA	DIを通して妊娠した、またはDIを通して妊娠しようとしている過程にある10組のレズビアンカップル (20人)	心理学	2004
6	Heteronormative communication with lesbian families in antenatal care, childbirth and postnatal care	Röndahl G. Bruhner E. Lindhe J.	SWE	8人が女性と関係をもつていた10人の母親が参加	看護学	2009
7	"It's not me, it's them": How lesbian women make sense of negative experiences of maternity care : a hermeneutic study	Lee E. Taylor J. Raitt F.	UK	8人の女性、そのうち7名が出産している。	看護学	2011
8	Marginalised mothers: Lesbian women negotiating heteronormative healthcare services	Hayman B. Wilkes L. Halcomb E.J. Jackson D.	AUS	妊娠を計画し、出産し、子育てをするレズビアンのカップル17組のレズビアンカップル (34人)	看護学	2013
9	Same, same but different Lesbian couples undergoing sperm donation	Borneskog C.	SWE	提供された精子による不妊治療を受けている165人のレズビアンカップルと体外受精を受けている151人の異性カップル	助産学	2013
10	Experiences of Preconception, Pregnancy, and New Motherhood for Lesbian Nonbiological Mothers	Wojnar D.M. Katzenmeyer A.	USA	パートナーが過去2年以内に出産した24人のレズビアン、の非生物学的母親	看護学	2014
11	Beyond sperm cells: a qualitative study on constructed meanings of the sperm donor in lesbian families	Wyverkens E. Provoost V. Ravelingien A. De Sutter P. Pennings G. Buisse A.	BEL	匿名のドナー精子による治療に受け、子どもを得た10組のレズビアンカップル (20人の参加者)	心理学	2014
12	Why Donor Insemination and Not Adoption? Narratives of Female-Partnered and Single Mothers	Goldberg A.E. Scheib J.E.	USA	36人の女性と14人のシングルマザー	心理学	2015
13	Lesbian women choosing motherhood: the journey to conception	Hayman B. Wilkes L. Halcomb E. Jackson D.	AUS	オーストラリアに住む15組のレズビアン カップル (30人)	助産学	2015
14	Mothers in Same-Sex Relationships Describe the Process of Forming a family as a Stressful Journey in a Heteronormative World: A Swedish Grounded Theory Study	Engström H.A. Håggström E. Borneskog C. Almqvist A.L.	SWE	同性関係にあるARTを通して妊娠した生物学的母親と非生物学的母親の20人の女性	看護学	2018

### 3) 精子ドナーの選択方法

レズビアンカップルは、生物学的なつながりのある子どもをもつことを決定する過程の中で、精子ドナーについて検討することが不可欠であり、多くの研究報

告がある。

英国において9組のレズビアンカップルにインタビューした Touroni & Coyle (2002) は、そのうち6組が既知のドナーを選択することに意思決定を下した

ことを報告している。その理由は、子どもが自分の遺伝的起源を知る権利および/または人生の早い時期にドナーとの関係を築く権利をもっていることを彼らが信じていると説明している。Hayman et al. (2015) ならびに Touroni & Coyle (2002) も、既知のドナーを選択した理由を子どもが大きくなったとき出自を知ることが可能であることを挙げ、匿名のドナーを選ぶ理由については、将来彼が子どもへの親権を主張することを恐れていることや、ドナーが子どもへ関与することを望んでいないからであると報告している。

Baetens et al. (2002) は、匿名の提供者からの精子による治療を検討することを求めた 95 人のベルギー人のレズビアンカップルに対し、半構造化インタビューを通じて、その 80% がドナーに関する情報を持ちたくない、11.8% がドナーに関するより多くの情報を持ちたいと思うと答えていることを明らかにしている。

Wyverkens et al. (2014) は、匿名のドナー授精で妊娠した 10 組のレズビアンカップルへの半構造化インタビューを通じ、精子の提供を受けたドナーに対する彼女らの見解について調査を実施している。その結果によるとドナーの存在は、妊娠するための手段としてとらえている場合と、ドナーを精子細胞を超えた意味のある人として捉えている場合の 2 パターンがあり、一部の家族は子どもの発達とともにドナーと子どもの遺伝的つながりに対する関心が高まることを報告している。しかし、ドナーに対する見解の違いについて、対象者が生物学的母親であるか、非生物学的母親であるかに関連はなかったことを明らかにしている。

#### 4) 不妊治療に伴う感情

Engström et al. (2018) は、生殖補助医療技術（体外受精、顕微授精法の総称以下 ART）を利用して妊娠した、生物学的母親と非生物学的母親の 20 人の家族を形成するプロセスを「異性愛規範の世界を通るストレスの多い旅」と説明し、対象者は ART にアクセスする方法の詳細情報が不足していると感じていることを明らかにしている。また、医療専門家にも同性のカップルが、ART を受けるために必要な専門知識が不足していることを指摘している。

Borneskog (2013) は、提供された精子による治療を受けている 165 人のレズビアンカップルと体外受精を受けている 151 人の異性カップルの治療期間を通しての、カップルの関係、感情、子どもが 1 歳に達したときの育児ストレスについて比較検討を行っている。その結果によると、レズビアンのカップルは異性

のカップルよりも提供精子による治療を行っている中で、二人の関係性に対して高い満足度があり、育児ストレスは異性のカップルよりも低いと報告している。

#### 5) 生物学的母親と非生物学的母親

Wojnar & Katzenmeyer (2014) は、レズビアンカップルの非生物学的母親（出産していないパートナー）24 名に対して、妊娠前、妊娠中、および子育ての経験についてインタビューを行った結果、非生物学的母親は生まれてきた子どもが、生物学的母親に対して多くの愛情をもつであろうと考えていることや、自分と子どもとの間に血縁がないこと、子どもに対する親権がないこと等から様々な葛藤を引き起こしていたことを報告している。また、生物学的母親と子どもとの間の遺伝的、そして感情的なつながりに対して、孤立感をもったり、医療機関での生物学的母親と平等でない扱いに複雑な思いを感じていることを明らかにしている。

Touroni & Coyle (2002) は、子どものいる 9 組のレズビアンカップルへのインタビューから、生物学的な母親は子どもとの関係において、非生物学的母親より強いきずなで結ばれていると感じており、それは母乳育児の経験の有無に関連していると報告している。さらに、ドナーの存在は監護権を持たない非生物学的母親を傷つけ、カップルの家族を脅かす可能性があると感じていることを報告している。

#### 6) 医療職者から受ける差別

Wilton & Kaufmann (2001) が行った 50 名のレズビアンが受けた産科ケアにおける助産師の態度についての聞き取り調査によると、ほとんどの参加者は受けたケアに満足していると感じている一方で、助産師の同性カップルに対する否定的な態度や好奇心に満ちた質問を受けた経験について報告している。そのため、レズビアンであることを開示して産科ケアをうけることに対し、ハイレベルの不安をもつことを報告している。Lee et al. (2011) も同様に 8 名のレズビアンのインタビューを通じ、彼女らが受けた産科ケアの経験がポジティブであると述べただけでなく、同性愛嫌悪によるネガティブな経験についても報告している。

Hayman et al. (2013) は、産科医療を求めているレズビアンの女性が、彼女らの健康管理場面においていくらかの同性愛嫌悪を経験したと報告している。研究対象者が経験した 4 つのタイプの同性愛嫌悪は、「非出産母親の排除」「異性カップルのみを想定したケア」「好奇心に満ちた不適切な質問」「医療サービスの拒否」が含まれ、当事者はこの経験によって不快や居ごこ

の悪さなどを感じている。

Röndahl et al. (2009) は、助産師がレズビアンのカップルへ対応の方法を知らなかったために、妊娠中の異性愛者の家族に提供されている親の教育を受けられなかったことに不満を表明したと報告している。

## V. 考察

### 1. 日本におけるレズビアンカップルの不可視性と社会的認知度

文献レビューの結果、レズビアンカップルが妊娠、出産を通して子どもをもつことに関して、看護的視点から扱った研究は本邦においてほとんど存在しなかった。レズビアンカップルの子育ての実態などが少数報告されてはいるが、事例数が少なく、個々の事例報告にすぎない。その理由として本邦ではLGBTに対する社会的認知度は、欧米と比較し遅れている。また、公的な統計が存在しないためにLGBTひとくくりにした結果が多く、その中でもレズビアンは、不可視性の高い対象（藤井，2009；柳原，2007b）と指摘されており、レズビアンの人口規模やレズビアンカップルの拳児、家族の実態がつかみにくい状況である。以上のような理由から研究対象者を募集することが困難なために、レズビアンのみ限定した研究は国内においては数少ないと推測される。

同性婚が認められていない本邦では婚姻しているカップルが得ることができる税制上、社会保障上で優遇される措置は同性カップルには保障されていないなど、レズビアンカップルは社会生活を営む上で、保障や法的擁護などの課題に直面する。

以上のような現状から、本邦においては社会学分野でのみ研究が行われ、看護的な視点からレズビアンカップルの存在が浮かび上がってこないことが推測される。

### 2. 欧米で実施されている先行研究の傾向

レズビアンカップルは子どもをもつことを決定する過程のなかで、いくつかの意思決定を行う必要があるが、その中で精子提供者の選択は意図的に行われていることがわかった。その理由として、精子提供者の選択の背景には非生物学的母親が関与しており、非生物学的母親は子どもとの関係、医療施設での対応などが弱い立場にあり、ケアを提供する中で特別な配慮が必要とされることが考えられる。これらから、研究のテーマとして非生物学的母親に関する研究や精子提供者についての研究が多く取り上げられていることが考えられた。

また、同性婚が容認されている国においても、医療職者の中に根強い同性愛嫌悪があり、医療職者が提供する産科ケアについては異性愛者のカップルを規範としたものであることを指摘されていた。同性愛嫌悪については、同性愛を断罪としてきた宗教的背景、近代精神医学の中でも疾病と位置づけられてきた歴史的背景が関連していると考えられる。同性愛嫌悪に関してはケア提供者からネガティブなアセスメントや態度が示されるクリニカルバイアスにむすびつくため、医療職者への対象理解についての情報提供と教育の浸透が重要なことを表している。

レズビアンカップルは精子提供により子どもをもつために、不妊治療を必要とする場合があり、不妊治療が彼女らの関係性、心理面にどのような影響を与えるかは、子どもをもつレズビアンカップルが増加するにつれ必要となる研究課題であると考えられる。

以上により近年欧米でレズビアンカップルが子どもをもつことに関する研究は、精子提供者の選択、生物学的母親と非生物学的母親がもつ心理的状況のちがいが、医療職者の同性愛嫌悪について、不妊治療を受けるレズビアンカップルの精神的健康などについて、関心が寄せられていた。

### 3. 今後の本邦での研究課題

国内でレズビアンカップルの妊娠・出産に関する看護系の研究が進まない理由としては、本邦では日本産婦人科学会が第三者の関わる生殖医療を受ける対象を婚姻関係のある異性のカップルに限定しているため、医療機関を介さない精子提供とレズビアンカップルであることを公表しないままに、水面下で妊娠・出産が進んでいることを医療職者が把握していない現実が考えられる。また、企業、学校教育の取り組みの早さと比較すると、医療職者に対する性的マイノリティに関する教育が遅れていることが要因として考えられる。現在、性の多様性を受け入れ、当事者の権利を保証しようとする社会の動きとともに、今後精子の提供を受け妊娠・出産するレズビアンが増加することが予想される（柳原，2007b；藤井，2009）。子どもの親になりたい場合、「特別養子縁組」制度を利用する選択肢もあるが、特別養子縁組を行うには法律上の婚姻関係が必要であるため、同性カップルはこの制度を利用することはできない。また子どもとの血縁関係をより重視する傾向が強くなっている現在、レズビアンが子どもをもつ方法として、非配偶者間人工授精やその後の不妊治療など生殖技術を利用することは当然考えられることである。本邦の産科医療は異性愛者のみを対象と



して規定されているため、レズビアンカップルは不妊治療や非配偶者間の人工授精の対象から除外されている。しかしアメリカ生殖医学会、ヨーロッパ生殖学会はともに人種や国籍と同等に、性自認や性指向、婚姻の状態によって生殖医療の提供を制限すべきではないとしている（中塚，2017）。子どもをもつ権利はすべての女性に平等であり、今後は不妊治療や産科医療の現場において、レズビアンカップルを想定したケアの提供が必要とされる。そのためには、看護の対象としてレズビアンカップルを含めるだけでなく、ケアの質を高めるためにその実態を把握するなどの対象理解を行うことが課題である。

海外ではすでに、多くの研究が発表されているが、その内容は文化的な背景や生殖補助医療を取り巻く法的整備、同性婚の容認などにより異なる。本邦においてレズビアンカップルの挙児の実態や、意思決定のプロセスに影響を与えている事象を明らかにすることは、医療職者が彼女たちの妊娠・出産を通して子どもをもつことについて、どのように関わるべきなのか検討するための、基礎的資料とすることができると考える。

## VI. 結論

1. レズビアン妊娠・出産を通して子どもを持つことに焦点をあてた国内文献は子育ての実態、子どもをもつことを選択した過程や子育ての中で直面する問題についての事例報告が、社会学及びその関連分野でされていたが、看護学領域では行われていないことが明らかになった。
2. 国外で行われている研究の傾向としてレズビアンカップルが子どもをもつ過程の中で、精子提供者の選択、生物学的母親と非生物学的母親がもつ心理的状况のちがいが、医療職者の同性愛嫌悪、不妊治療を受けるレズビアンカップルの精神的健康が取り上げられていたことが明らかになった。
3. 本邦での今後の研究課題はレズビアンカップルの挙児の実態や、意思決定のプロセスに影響を与えている事象を明らかにし、医療職者が彼女たちの妊娠・出産、子育てにいかに関わるべきなのか早急に検討することである。

## VII. 研究の限界

日本では文献の事例数が少なく、レズビアンそのものが可視化されていない状況であるため、個別の事例として捉えざるを得ない。

海外文献においては、先進国で行われた研究であり、

対象者は比較的教育水準や経済水準の高い層であることが推測され、多くが同性婚が容認されている国で行われている。そのため、これらの結果をすべてのレズビアンカップルの代表と考えることは出来ない。

## VIII. 利益相反

当該研究に係る利益相反、及び個人の収益は無い。

## IX. 著者資格

MUは研究の着想およびデザイン、原稿作成に貢献、MNは研究プロセス全体への助言および原稿への示唆、ENは論文構成及び考察、原稿作成への貢献、すべての著者は最終原稿を読み、承認した。

## X. 引用文献

- 血縁と婚姻を越えた関係に関する政策提言研究会 (2004) : 同性間パートナーシップの法的保障に関する当事者ニーズ調査. 7,14, [https://0b207c54-33fe-4b42-a597-f1895bb32067.filesusr.com/ugd/afe1fc\\_d515ec0018294bd883ee46a5740bf034.pdf](https://0b207c54-33fe-4b42-a597-f1895bb32067.filesusr.com/ugd/afe1fc_d515ec0018294bd883ee46a5740bf034.pdf) (検索 2018.11.24)
- Baetens P., Camus M., Devroey P. (2002) : Counselling lesbian couples: requests for donor insemination on social grounds, *Reproductive BioMedicine Online*, 6 (1), 75-83.
- Borneskog C. (2013) : Same same but different: Lesbian couples undergoing sperm donation, <http://uu.diva-portal.org/smash/get/diva2:660397/FULLTEXT14.pdf> (検索日 2018.1.27)
- Bos H.M.W., Balen F., Boom D.C. (2003) : Planned lesbian families : their desire and motivation to have children, *Human Reproduction*, 18(10), 2216-2224.
- Chabot J.M., Ames B.D.(2004) : "It Wasn't 'let's get pregnant and go do it'" : Decision Making in Lesbian Couples Planning Motherhood via Donor Insemination, *Family Relations*, 53(4), 348-356.
- Engström H.A., Häggström E., Borneskog C. et al. (2018) : Mothers in Same-Sex Relationships Describe the Process of Forming a Family as a Stressful Journey in a Heteronormative World : A Swedish Grounded Theory Study, *Maternal and Child Health Journal*, 22(10), 1444-1450. doi : 10.1007/s10995-018-2525-y
- Goldberg A.E., Scheib J.E. (2015) : Why donor



- insemination and not adoption? Narratives of female-partnered and single mothers, *Family Relations*, 64(5), 726-742. doi : 10.1111/fare.12162
- 博報堂DYグループの株式会社LGBT 総合研究所 (2016) : LGBT に関する意識調査, <http://www.hakuhodody-media.co.jp/wordpress/wpcontent/uploads/2016/05/HDYnews0601.pdf> (検索日 2018.6.1)
- Hanson S.M.H., Gedaly-Duff V., Kaakinen J.R. (2005) : *Family Health Care Nursing, Theory, Practice, and Research Third Edition*, F.A. Davis, Philadelphia.
- Hayman B., Wilkes L., Halcomb E.J. et al. (2013) : Marginalised mothers: Lesbian women negotiating heteronormative healthcare services, *Contemporary Nurse*, 44(1), 120-127. doi : 10.5172/conu.2013.44.1.120
- Hayman B., Wilkes L., Halcomb E.J. et al. (2015) : Lesbian women choosing motherhood : The journey to conception, *Journal of GLBT Family Studies*, 11(4), 395-409.
- 藤井ひろみ (2009) : 日本におけるレズビアン妊娠・出産 : 米豪レズビアンマザー情報の影響と日本の課題, <https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-21651108/21651108seika.pdf> (検索日 2018.7.22)
- Lee E., Taylor J., Raitt F. (2011) : "It's not me, it's them" : how lesbian women make sense of negative experiences of maternity care : a hermeneutic study, *Journal of Advanced Nursing*, 67(5), 982-990.
- Millbank J. (2003) : From here to maternity : A review of the research on lesbian and gay families, *Australian Journal of Social Issues*, 38(4), 541-600.
- 村田藍, 川崎妃香里, 菅沼信彦 (2014) : セクシュアル・マイノリティにおける生殖補助医療に対する意識調査, *日本性科学会雑誌*, 32(1), 31-37.
- 中塚幹也 (2017) : 性の多様性に対する生殖医療の役割, *医学のあゆみ*, 263(4), 349-351.
- Röndahl G., Bruhner E., Lindhe J. (2009) : Heteronormative communication with lesbian families in antenatal care, childbirth and postnatal care, *Journal of Advanced Nursing*, 65(11), 2337-2344.
- Simmons T., O'Connell M. (2003) : Married-Couple and Unmarried-Partner Households : 2000, <https://www.census.gov/prod/2003pubs/censr-5.pdf> (検索日 2018.10.1)
- Touroni E., Coyle A. (2002) : Decision-Making in Planned Lesbian Parenting An Interpretative Phenomenological Analysis, *Journal of Community & Applied Social Psychology*, 12(3), 194-209.
- Wilton T., Kaufmann T. (2001) : Lesbian mothers' experiences of maternity care in the UK, *Midwifery*, 17(3), 203-211.
- Wojnar D. M., Katzenmeyer A. (2014) : Experiences of preconception, pregnancy, and new motherhood for lesbian nonbiological mothers, *Journal of Obstetric Gynecologic & Neonatal Nursing*, 43(1), 50-60.
- Wyverkens E., Provoost V., Ravelingien A. et al. (2014) : Beyond sperm cells : a qualitative study on constructed meanings of the sperm donor in lesbian families, *Human Reproduction*, 29(6), 1248-1254.
- 柳原良江 (2007a) : 育児・子育て希望者の多様化がもたらす課題, *生命倫理*, 17(1), 223-232.
- 柳原良江 (2007b) : 「親になること」におけるジェンダーの力学－レズビアン・マザーたちのライフヒストリーの語りから－, *F-GENS ジャーナル*, 9, 135-143.
- 杉浦郁子, 釜野さおり, 柳原良江 (2008) : 女性カップルの生活実態に関する調査分析－法的保障ニーズを探るために－, *日本性研究会議会報*, 20(1), 30-54.